

# 第一次世界大戦期イングランド教会における 「悔悛と希望の国民伝道」

吉 田 正 広

## I はじめに

第一次世界大戦が勃発した時に、イングランド教会の聖職者たちは、戦争の勃発を「神の裁き」と考えた。すなわち、戦争は「天の裁き、すなわち、西欧の諸国民、特にイングランドを罰するために主によって『送られた』惨禍」であると認識されたのである。聖書講読や家族礼拝の衰退、日曜礼拝への出席減少、その裏にある酒浸りや不道徳といった「安息日冒瀆」がイングランドで蔓延しており、これらの罪に対する「神の裁き」が戦争であると認識された。もちろん、キリスト教徒であるイングランド人が戦争に対してどのように向き合うべきかについては聖職者の間で一定の多様性が見られた。一方には、戦争が神の罰であれば、それに抵抗してはならず、犠牲が必要であり、若者は兵士に積極的に応募すべきであると説教壇から強く訴えかけた聖職者がいた。ロンドン主教のウィントン・イングラム Arthur F. Winnington Ingram がその典型であった。他方で、戦争が「神の裁き」であることを前提とした上で、兵士として戦場に赴くことは、市民としてのキリスト教徒の義務であり、決して犠牲を捧げるのではないと考える聖職者もいた。この代表がセント・ジェームズ教会の主任司祭に就任したばかりの若きウィリアム・テンブル William Temple であった。また、「神の裁き」の原因は当初のイングランドあるいはイングランド人の罪からやがてドイツおよびドイツ人の罪へと力点が変化するようになる。

ところで、戦争勃発当初の熱狂的雰囲気の中で、兵士として武器を取った聖職者も少数いたが、若い聖職者の多くは従軍牧師 *army chaplain* として戦場へ赴いた。彼らは戦場で兵士を前に野外礼拝を行ったり、傷病兵の世話や戦死者の葬儀や埋葬、さらには戦場の兵士の家族への手紙の代筆など、様々な活動を展開した。彼ら従軍牧師たちは、戦場で一般の兵士と接触することによって、兵士たちにキリスト教信仰が欠如していることを見出したのである<sup>2)</sup>

このような従軍牧師によって兵士たちの間での信仰の欠如が報告される中で、イングランド教会の中に一つの運動が起こった。これが「悔悛と希望の国民伝道」*National Mission of Repentance and Hope* と呼ばれる運動である。その運動自体は、1916年におけるカンタベリー大主教を初めとした主教たちから平信徒に至る幅広い運動であった。しかしながらその起源を見てみると、1915年初頭以来の平信徒や若い聖職者たちの活動の中から始まり、やがては大主教による呼びかけに至ったのである。この運動には、ロンドン主教ウィニントン・イングラムとセント・ジェームズ教会の主任司祭ウィリアム・テンブルが深く関わっていた。運動それ自体は失敗に終わったと言われてはいるものの、やがて、イングランド教会の国家からの自立を目指す運動であるライフ・アンド・リバティ運動<sup>3)</sup>へとつながっていく。この「悔悛と希望の国民伝道」とはどのような運動であったのであろうか。この運動は20世紀イギリスにおける信仰復興の原点であるとも評価されている。本稿は、この「悔悛と希望の国民伝道」の起源と運動の展開過程をこれまでの研究成果に依拠しつつ追ってみると共に、運動の中心的なメッセージについて運動の中心人物の一人ウィニントン・イングラムの見解を中心に見ていくことにする。

これまで、「悔悛と希望の国民伝道」については、ウィリアムソンによる第一次世界大戦期のイングランド教会に関する古典的な研究が、1章をさいて比

1) 吉田正広「第一次世界大戦期におけるイギリス国教会の戦争認識—ウィリアム・テンブルの認識を中心に—」『愛媛大学法文学部論集・人文学科編』19号、2005年、64～69頁。

2) Allan Wilkinson, *The Church of England and the First World War*, London, 1978, pp. 109-135.

3) ライフ・アンド・リバティ運動については、さしあたり、*Ibid.*, pp. 271-274を参照。

較的詳しく論じている。ウィリアムソンは、「1916年秋における悔悛と希望の国民伝道は、戦時期の国民の霊的要求に対するイングランド教会側の対応の試みであった。すなわち、国民のキリスト教的良心として行動するという教会の使命感を實踐する試みであった。それはまた、イングランド教会は時代の要請に答えなければならないと主張した（ホレイショ・ボトムリーを含む）人々に対する効果的な対応として意図されたものでもあった<sup>4)</sup>」と評価している。それに対して、トムソンは、国民伝道にかかわった当事者たちの書簡などの史料を駆使して、伝道活動の成立過程を詳しく分析している。トムソンは、国民伝道に関しては、研究書のみならず、当時の聖職者たちの伝記や自伝などにおいても国民伝道が失敗であり、その後の「ライフ・アンド・リバティ」運動との関連性においてのみ評価されていることに対して批判的な立場に立ち、むしろ国民伝道の成立過程に注目することで、国民伝道の画期性を強調している<sup>5)</sup>。また、ウィリアム・テンプル<sup>6)</sup>や、ウィニントン・イングラム<sup>7)</sup>さらに当時のカンタベリー大主教ランダル・デーヴィッドソン<sup>8)</sup>らの伝記や自伝においても国民伝道に言及がなされているが、必ずしも国民伝道の全体像が明らかになっているとは言い難い。アイアモンガーによるテンプルの伝記には国民伝道について比較的詳細な記述がなされている。おそらくそれぞれの人物の「国民伝道」に対する姿勢の違いがこのような伝記における扱われ方の違いになったと言え

4) *Ibid.*, p. 70.

5) D. M. Thompson, "War, the Nation, and the Kingdom of God: The Origins of the National Mission of Repentance and Hope", in W. J. Sheils, *The Church and War: Papers read at the Twenty-First Summer Meeting and the Twenty-Second Winter Meeting of the Ecclesiastical History Society*, London, 1983.

6) F. A. Iremonger, *William Temple: Archbishop of Canterbury His Life and Letters*, London, 1948.

7) S. C. Carpenter, *Winnington-Ingram: the Biography of Arthur Foley Winnington-Ingram Bishop of London 1901-1939*, London, 1949; A. F. Winnington Ingram, *Fifty Years' Work in London (1889-1939)*, London, 1940. ウィニントン・イングラムの伝記では、国民伝道は社会道徳の問題として論じられる傾向がある。また、これらの伝記および自伝では、第一次世界大戦期におけるロンドン主教の活動は、特に陸軍や海軍の訪問の様子が特に詳しく論じられている。戦争に対するウィニントン・イングラムの積極的な姿勢が伝記に表れていると言えよう。

8) G. K. A. Bell, *Randall Davidson: Archbishop of Canterbury*, London, 1935, 2 vols. デーヴィッドソンの伝記では、国民伝道は女性の聖職者の公認の問題と関連して論じられている。

るであろう。

本稿では以上のような研究に鑑みて、まず国民伝道の起源についてこれまでの研究に依拠して整理し、その上で、国民伝道の代表者を務めたウィニントン・イングラムの演説を手がかりに運動の基本的な姿勢について明らかにしておきたい。

## Ⅱ 国民伝道の起源と実践

この「悔悛と希望の国民伝道」の起源については、トムソンによる詳しい研究がある。それによると、運動には単一の起源はなく、1915年初頭のイングランド教会内部の様々な動きの中で始まったとされている。また、第一次世界大戦期におけるイングランド教会の諸活動を幅広く解明した古典的な研究であるウィリアムソンの研究では、国民伝道につながった1915年初頭における教会内部のいくつかの動向について詳しく論じられている。以下、この二つの研究に依拠し、さらに、当時のカンタベリー大主教デーヴィッドソンの伝記などを利用して整理しておきたい。

ウィリアムソンの研究で運動の開始をもたらした人物として特に注目されているのが、当時マンチェスター近郊の町ソルフォードのセント・フィリップ教会のレクターであると同時にマンチェスター大聖堂の参事会員を務めていたピーター・グリーンである。彼はセント・フィリップ教区というソルフォードの比較的貧しい地区を担当し、経験を積んだ教区司祭として有名であった。第一次世界大戦が始まった時、『マンチェスター・ガーディアン』紙に掲載されていた担当のコラムを戦争によって与えられた牧師の仕事のために捧げた。また、彼は教区司祭の職務のあり方についてその講師としても大変人気があり、教区司祭の職務に関する数冊の本を書いていた。それらによれば、教区の若者が入隊することが分かった時には、教区司祭はその家庭を訪問して、家族とともに祈り、出征兵士に祝福を与えるべきこと、飲酒と売春の危険性について出征兵士に警告し、出征中月に一度はその兵士に手紙を書き、定期的に兵士の両

親を訪問すべきこと、出征兵士からの司祭宛の手紙の文章の一節が、代禱礼拝の時に朗読されるべきことなどが教区司祭の務めとして規定された。また、戦時中、教会は礼拝のために常に開けておかれるべきであり、人々に礼拝を勧める印刷物の用意や、毎日の聖餐式の執行は重要であると述べた。また、若い司祭たちに対しては、「われわれの仕事は英雄的ではないが、行う価値がある」と述べて、戦時中兵士だけでなく司祭にも重要な役割があると説いた<sup>9)</sup>

1915年1月14日と21日にピーター・グリーンはマンチェスター・ガーディアン紙の記事の中で「教会の完全な失敗」について次のように書いた。教会は、国民に対して戦争が正義であることを保証するだけでは十分ではなく、また、過去40年間の出来事を無視して戦争直前の数週間だけに話を集中するのは良くない。良心の苦しみと胸の鼓動の時であるが、あまりにしばしば聖職者たちは、ドイツの悪を信ずるのに熱心すぎるように思われると。彼は多くの機会にこのテーマに触れ、1916年の1月6日から3月16日にかけての一連の記事において、国民と教会に悔悛を呼びかけた。諸教会の現在の失敗は、戦前の継続にある。諸教会は、無抵抗 non-resistance の意味も、福音的貧困へのキリストの呼びかけも教えなかった。諸教会は、労働者たちの目標を理解することができず、知識人と上流階級の支持を得ることができず、常連の教会出席者たちに対して十分な訓練と滋養を与えることができず、純粋に民衆的な信仰スタイルを生み出すのにも失敗した。「人々が教会に目を向ければ、跪いて神を求める国民の姿ではなく、一つの組織が組織のために寄付金を大事にしている姿を目にした」と2月17日に書いた。使徒の継承者が宮殿 palace に住むのはスキャンダルであり、それは主教が生活様式において上流階級に属することを意味する。イングランド教会がその富と特権を放棄することほど国民に訴えるものはない。彼はこのように述べて、イングランド教会の霊的特権の放棄をも要求した。すなわち、非国教徒である自由教会員たちがイングランド教会において正餐式と説教を受けることができるべきであると<sup>10)</sup>

9) Ibid., p. 68.

ピーター・グリーン以外にも、1914年末から1915年にかけて、信仰の在り方を問う運動の必要性を訴える動きが生じた。トムソンによると、1915年1月には「その国のすべての教区における一つの大規模な国民伝道」の必要性が叫ばれているし、また、ウィリアム・テンプルによると、1915年の春から夏にかけて、イングランド教会の平信徒の一部は、「国民が靈的な生活を送ってはいない」と嘆き、このような事態を改めるための運動の必要性を大主教ランダル・デーヴィッドソンに訴えている。しかしながら大主教は当初この呼びかけに消極的であり、教会は人手が足りないこと、もっとも精力的な聖職者は陸軍および海軍に仕えていること、イギリスは戦争という、より直接的で緊急な課題に関わっていること、また、あらゆる面で人びとは過重労働の圧迫と肉親の戦死を心配していること、さらに、国民教会が指導する靈的な運動を進める機会は戦争が終わった後に到来するであろうことなどを、その理由として列挙した。これに対して平信徒の側は、デーヴィッドソン大主教に対して、教会が「時代の要求に一致する何らかの靈的な企画に参加する呼びかけ」に対しては幅広い支持が得られると主張し、結果的には、大主教は提案を受け入れる約束をし、この問題を検討するための12人のメンバーを選抜し、彼らにその検討を命じたとされている<sup>10)</sup>。正確な日付と、平信徒たちが誰であるかはアイアモンガーの伝記からは不明であるが、このように平信徒からの要求があつて初めて国民伝道が行われることになったのである。また、トムソンによれば、彼らの要求は、「個人の生活や社会生活、職業生活、国民生活をキリストの理念に近づけるための努力をしなくてはならないのではないか」と訴えた1915年6月の「キリスト者の現在の義務」と題する論文に反映されていると言われている<sup>12)</sup>。

この間、イングランド教会の主教の一部からも、同様な要求が大主教に対してなされている。ウースター主教のイエートマン・ビッグズは、戦争の中で教

10) Wilkinson, *op. cit.*, pp. 70-71. ウィルキンソンは、以上のような提案について、この時期のアングロ・カソリックの教会員としては大変異例であるとコメントしている。*Ibid.*, p. 71.

11) Iremonger, *op. cit.*, pp. 206-207.

12) Thomson, *op. cit.*, p. 338.

会は「靈的な機会」を捉えるべきであると大主教に訴えている。このような信徒や聖職者からの圧力に呼応するかたちで、デーヴィッドソン大主教は、ロンドン塔のそばにあるオール・ハロウズ・パーキング伝道者養成学校長のロビンソン A. W. Robinson に会議の招集とメンバーの選定を依頼した。

1915年7月29日付けの大主教の回状は、そのメンバーに、「この戦争が提供する『好機を捉え』て、神の助けによって、戦争の様々な悪から善なるものを導き出すための方法を考察すること」に参加するよう要請した。このメンバーには、先のピーター・グリーンやウィリアム・テンプルが含まれていた<sup>13)</sup>。その結果、10月4～6日にビーコンスフィールドにおいて会議が開かれた。この会議は、「戦争の結果予想される必然的な反作用が起きる前に、二人の大主教に率いられた国民伝道 National Mission が実施されなくてはならない。この伝道はこれまでに考えられなかったほどの規模でなければならず、また、国土のあらゆる都市と町、村に拡大されなくてはならない」と満場一致で提案した。

1915年11月24日には、ロンドン主教ウィニントン・イングラムの議長の下で会議が開かれ、以下の項目が確認された。

- 1 現在の緊急事態は、戦争における神の召命を国民に知らせるための教会による次のような特別な行動を必要としている。すなわち、a 神の前での〔国民の〕責任を理解すること、b 世界中でキリストの王国に仕える準備を新たにしなければならぬという〔国民の〕義務を認めること、そしてこの目的のために、c〔国民〕自身の生活の中から、正義に反し、兄弟愛を妨げるようなことがらを除去すること。
- 2 この行動のための予備行為として、教会を目覚めさせる次のような努力

13) このメンバーには、ロビンソンの他、バローズ E. A. Burroughs (オクスフォード大学ハートフォード・カレッジのチャプラン)、カニングガム B. K. Cunningham (Warden of Bishop's Hostel, Farham)、フリア W. H. Frere, of Mirfield、ピーター・グリーン Peter Green, of Manchester、ホームズ E. E. Holmes (Archdeacon of St. Paul's Cathedral)、ストー V. F. Storr, Canon of Winchester、ウィリアム・テンプル William Temple, of St. James, Picadilly、マリー J. O. F. Murry, Master of Selwyn College, Cambridge、トレヴェリアン W. B. Trevelyan, of Beaconsfield が含まれていた。

がなされなくてはならない。すなわち、a 十字架に架けられ、復活し、昇天したキリストは現在の生活の支配者であると〔教会が〕宣言することの偉大さを理解すること、b〔教会が〕聖霊の力で新たに満たされること、またこの目的のために、c 交わりを妨げ、礼拝と証を偽りのものにしてしまうようなことがらすべてを、教会生活のあらゆる領域から進んで除去すること<sup>14)</sup>

ここには、国民伝道が、国民に対して悔い改めを要請するものであると同時に、教会自身が悔い改めなくてはならないことが示されている。

以上のように、「悔悛と希望の国民伝道」は、一方で戦争の中で国民の不信仰に対して改めて伝道を行い、同時に、教会自身が戦争の中で新たな使命を自覚するための運動として始まったと言えよう。その後、この運動は1916年2月15日にカンタベリー聖職者会議で正式に宣言され、ロンドン主教ウィントン・イングラムがその指導者に選ばれた<sup>15)</sup>

14) Thompson, *op. cit.*, p. 341.

15) この間、1916年1月5日に徴兵法案が議会上程され、イギリスで徴兵制が施行されるようになると、この運動は当初の目的から少しずつそれていくことになる。すなわち、聖職者が兵役から免除されるべきか否かという、戦争における聖職者の兵役をめぐる議論にすり替えられていくことになる。次に掲げるウィントン・イングラムの文章はこのことを端的に物語っている。

教会は次のような目的のために存在する。国民に高貴で気高い政策方針を採用させ、水兵や兵士に不屈の精神と勇気を満たし、彼らが必要とする霊的で聖餐にかかわる助けを豊富に与えるために、自己犠牲の奉仕の模範となるために、病人と負傷者を訪問するために、また、人民の代禱を昼夜導くために。

これらの事例のいずれかにおいて、教会がどこで失敗し、戦争の2年目に教会がどのようにしたら改善できるかを指摘しうる人はだれでも、教会に対する大きな奉仕をなすことになるだろう。

しかし、接手された聖職者すべての第一の義務は戦闘員として軍籍に入ることであると考えている批判者たちは、問題を十分に深く考察してはいない。あらゆる教会員にとっての問題は、「私が何をしたいか」ではなく、「私が為すべきことで国民にとって何が最も最良か」である。

国民は、前線で非戦闘員の従軍牧師（チャブレン）がおらず、国内で代禱礼拝が行われず、病人、負傷者、不安に満ちた人びと、および追悼者の間で聖職者の仕事がなされないことが国民にとって最良であろうか。

この文章には、戦争の中で聖職者が果たすべき役割を列挙し、戦争に国民を動員していく聖職者の姿が描かれているように思われる。Winnington-Ingram, *op. cit.*, pp. v-vii.



ところで、この国民伝道の組織についてはアイアモンガーによるテンプレの伝記にある程度記載されている。それによると、中心的な組織として、「伝道中央評議会」the Central Council of the Missionがおかれ、そのメンバーは70名で、後に100名に増加している。実務担当としては、5名の書記が任命されている。この書記の一人にウィリアム・テンプレが就任し、実質的に彼が中心的な役割を果たしている。また、そのほか、実務的な7つの委員会が設置されている。この委員会の中、文献委員会 literature committee はテンプレが担当し、伝道に関わるポスターやパンフレットなど、実務的な責任者であった。また、全国各地からの演説者派遣要請に対処するために、「派遣者名簿」が作成されている<sup>16)</sup>

次に国民伝道の実際の活動について触れておきたい。伝道の中心的な活動は、各主教が主教区の聖職者全員をそれぞれの主教座聖堂に集めて、修養会 the retreat を開催し、主教が聖職者一人ひとりと接触することであった。これは、最初、1916年の1月に大主教デーヴィッドソンによって行われた。カンタベリー主教区の聖職者全員を数日に分けてカンタベリー大聖堂に招いたのである。これは、国民伝道に先立って教会自身はその交わりを回復して、悔い改める手段であった。ロンドン主教のウィニントン・イングラムも、ロンドン主教区の聖職者全員を集めたフラム・パレスでの修養会を実施している。1916年7月23日に実施されたフラム修養会にはテンプレも出席している。この修養会は各地で開催され、教会自身の運動として実施された。また、このような各地で行われた修養会に、テンプレなど運動の活動的なメンバーが演説のために参加している。また、各地で一般向けの集会も開催され、そこでの演説のためにテンプレはイングランド各地を巡っている。その途中でパブリック・スクールをも訪れたりしている。このようにテンプレは大変精力的に各地の集会や聖職者の修養会を巡っていた<sup>17)</sup> おそらくこのような活動が国民伝道の中心的な活動であったと言えよう。

16) Iremonger, *op. cit.*, pp. 211-212.

17) *Ibid.*, pp. 212-214.

このほか、教区レベルでは、「祈りの巡礼」the Pilgrimage of Prayer の実施が報告されている。これは教区において、一般の信者、特に女性たちが最低限必要なものを背負って、村から村へ渡り歩いて伝道活動をするものであった。この祈りの巡礼についてカンタベリー大主教デーヴィッドソンは特に書簡の中で触れ、信仰を広める上での女性の役割を大主教自身評価している<sup>18)</sup>

### Ⅲ 国民伝道の論理—ウィントン・イングラムの演説—

それでは次に、国民伝道はどのような論理で展開したのだろうか。国民伝道は様々なパンフレット類を発行しているが、その中の一つに1916年に出版された『何が悪いのか—悔悛と希望の国民伝道のための9の講演』<sup>19)</sup>がある。このパンフレット集の表題「何が悪いのか」は、先に見た「教会の失敗」というピーター・グリーンらの問いかけに対する教会側の対応と考えても良いのではないだろうか。そこでこのパンフレット集に掲載された国民伝道の議長ウィントン・イングラムの演説「悔悛と希望の国民伝道」を検討する。この演説は、国民伝道全体の論理を見る上で重要であると思われるので、その論旨を以下において検討する。

この演説においてウィントン・イングラムは、まず最初に、「教会は、ポケットに手を突っ込んで炉辺の向こう側に長いコートを着て座っている年老いたジェントルマンで、ポケットから手を出させるのに2年かかり、コートを脱がせるのにもう2年かかる」という描写が一般になされているが、断固退けるとしている。そして「国民の歴史における危機」において教会は沈黙して何も言うべきではないという考え方に断固反対する。教会は今日国民に対して発言すべきである、と強い調子で語りかける。では、教会は国民に何を語りかけるべきか。

18) Bell, *op. cit.*, pp. 768-770.

19) B. G. Bouchier, (ed.), *What is Wrong?: Nine Addresses for the National Mission of Repentance and Hope*, Lodon, 1916.

## 1 国民の勇気と不屈の精神

ウィントン・イングラムは、何よりもまず、教会は国民の精神に、戦争というこの瞬間に国民が必要とする勇気と不屈の精神を吹き込まなくてはならないと主張する。この箇所ではイギリスが何のために戦争を闘っているか説明する。戦争の目的は、第1に「われわれの祖国の存続」preservation of our own countryであり、第2に「国際的な名誉」である。そして、彼は「釘打たれた手」Nailed Handと「武装した拳」Mailed Fistとの対比に言及する。前者はイギリス、後者がドイツとなる。戦争は両者の間の戦いであり、すべてはわれわれの不屈の精神と勇気と強さにかかっている。不屈の精神が重要であり、教会はそれを国民に吹き込むことが第1に重要となる。「それゆえ、教会は何よりもまず国民に不屈の精神を吹き込まなければならず、また、われわれがそれをできなければ、われわれは国民の歴史における危機の中で国民を見捨てることになる」と。そして彼は、次のように聖職者たちに問いかける。少年や兵士と彼らが後に残した女性たちをわれわれ聖職者は精一杯支援したのか。われわれの教区に所属する兵士一人ひとりについて所属する部隊の従軍牧師に手紙を書き送ったのか。彼らが残した女性たちに、彼女らを世話する兄弟や父親たちが身近に存在するかのようにならせたのか。また、女性が酒を多く飲むのは悲しいと警告するだけではなく、心配と寂しさの中で彼女らの傍らにいたのか。以上のように問いかけ、戦時期における聖職者たちの役割を確認する。また、あらゆる大通りには一つの「名誉の戦死者名簿」a Roll of Honour が掲げられて、花が捧げられ、国旗が周りに飾られ、その下には祈りの言葉が置かれることがロンドンのハックニー教区で行われていることを紹介している<sup>20)</sup>

第2にウィントン・イングラムは、代禱礼拝 intercessory services をこれまで以上に行うことを聖職者たちに勧めている。さらに、第3に、明白な悪に対する燃え立つ怒りもキリスト教精神であることを力説し、ドイツの潜水艦が

20) *Ibid.*, pp. 4-8. 大通りの「名誉の戦死者名簿」は、街路霊廟 street shrine と呼ばれ、イースト・エンドで始められ、王室によって援助されたことが、ウィリアムソンの研究で言及されている。Williamson, *op. cit.*, pp. 170-171.

客船「ルシタニア号」を沈没させたことに対する抗議を訴えている。第4に、教会は死後の生命の輝きについて力説しなくてはならないとし、死は最大の不幸ではなく、教会は、われわれが死者と呼ぶ者たちの生涯は終わりではなく始まりに過ぎないことを人々に信じさせなくてはならないと主張している<sup>21)</sup>。ここには、戦争に積極的に関わったことで有名なウィントン・イングラムの面目躍如たることが示されていると言えよう。

## 2 国民の悔い改め

さて、次にウィントン・イングラムは、「国民に対する教会の第2の義務」である国民の悔い改めについて論じている。それは次のような論旨である。

イギリス国民は「戦争の中に」*in the war* あるだけでなく、「戦争の下に」*under the war* ある。すなわち「国民は、浄化の過程すなわち厳しい試練としての戦争の下にある。一部の人々は、これら二つの観点は相互に矛盾すると考えるが、人が重大な任務に携わる時、人は自らの弱点や罪をより意識するようにならないだろうか。もしわれわれが、この国民はこの戦争において神の事柄を守ることを命じられていると信ずるならば、あるいは、自由の時代に磨きをかけられたわれわれが、神の怒りの日のために神の矢筒に入れられた矢となる運命であると信ずるならば、なお一層の確信を持って、その矢は神の手の中で折れることはないと信ずるであろう。イングランド中で国民に悔悛を説くなお一層の理由があると考えるのは、われわれの大儀の正当性を信ずるからなのである<sup>22)</sup>」。教会の義務は、神の手中で矢を容易に折ってしまうような国民の罪の一部を国民に気づかせることであると述べている。ではイングランド国民はどのような罪を犯したというのであろうか。

イングランドが犯した5つの罪について次のように論じている。

(1) 第一にイギリスは第一次世界大戦直前、3つの悪徳を犯す寸前にあった。すなわち第1に内戦、第2に男女間の激しい闘争、第3に労使紛争である。

21) Bouchier, *op. cit.*, pp. 8-10.

22) *Ibid.*, p. 10.

「このような3つの悪徳にわれわれを陥らせた兄弟愛の崩壊ないし何かの別の欠陥が、国民の間に生じたに違いない。われわれは、それが何であったのかを見出すために、国内政治の小康状態という機会を利用しないとすれば、われわれは国民として正気ではない<sup>23)</sup>」。これらの3つの悪徳を犯す寸前にあったことが、イギリスの第1の罪である。

(2) 第2の罪は、国民が神の栄光を忘れたことである。ウィントン・イングラムは、エリザベス朝時代に無敵艦隊の到来を狼煙で知らせた「ウースターシャー狼煙」の故事を引いて、ウースターシャーの聖職者は「ヨーロッパの他の諸国民と同じく国民は神の栄光を忘れているという真の警告を国民全体に送った。日曜日により正しく守られていたか、われわれ自身に尋ねてみよう。公の礼拝にはよく参加したか。家族礼拝はしばしば行われたか。食事の前の感謝の祈りは言われていたか。宗教教育は削減されたのか、それとも増えたのか。私はあえて、誰もが跪いてこのことを直視すべきであると言いたい。それが真の告発である<sup>24)</sup>」と述べている。

(3) 第3の罪は、飲酒の罪である。国民飲酒法案に関連して、絶対禁酒主義者ウィントン・イングラムは禁酒あるいは節酒による節約を呼びかけている。「もしわれわれが飲酒の習慣を止めるのを拒否するならば、われわれは神の偉大な日を無駄に浪費してしまうであろう」と述べ、議会法による酒の節制、統制庁 the Board of Control の権限によるその実施を歓迎している。飲酒という「国民の危険は、大変遅々としてしか処理されず、しかもほんの一時期であった。しかし、もしわれわれがかつての時代に戻るのを許すとすれば、われわれは実際正気ではないであろう。それは、この大罪が再びわれわれに取り憑くことを許すのを単純に意味するわけではない。われわれが飲酒という国民的罪を悔い改めなければ、われわれは、悔悛と希望への呼びかけに失敗してしまうであろう<sup>25)</sup>」と。

23) *Ibid.*, p. 11.

24) *Ibid.*, pp. 11-12.

25) *Ibid.*, pp. 12-13.

(4) 第4の罪は性欲 *lust* である。すなわち、それは国民に損害を及ぼし、その結果、人口の10分の1が接触感染症に冒されている。ウィントン・イングラムは「教会の戸口で行われている特定の諸問題を処理するために、教会の権限内にあることすべてを行う」とし、「闘争組織としての教会」に信頼を置くと述べている。さらに彼は、「悔悛と希望の福音を説くために私がイングランド中を廻りながら、ロンドンにおける公然の道徳的下水道 *an open moral sewer* を私が個人的に許容するとロンドン住民が考えるならば、それは間違い」であり、公然の密会の場であるミュージック・ホールや子どもに道徳的悪影響を与える映画の問題をも取り上げるとしている。「かつて教会は、不人気と迫害に直面して、真の諸原則のために最後まで戦った。私は時に、われわれは現世と妥協しすぎているのではないかと恐れる<sup>26)</sup>」として、教会による断固たる姿勢を示している。

(5) 第5の国民の罪は帝国の問題である。ウィントン・イングラムは、この帝国の問題について次のように主張する。

この巨大なわれわれの帝国がわれわれに与えられているのはなぜだと思えますか。帝国はもっぱら帝国それ自体のために存在していると考えるのは、これまでの諸帝国の持っていた欠陥であります。世界中に及ぶこの広大な帝国がわれわれに与えられているのはなぜかという質問には、たった一つの答えしかありません。世界中にこの世の光を示すための巨大な燭台となるためです。われわれは、諸国民の間に福音を広めるためのこのようなすばらしい権力を与えられています。途方もない努力と、過重労働の宣教師たちによる絶え間ない演説や説教とによって、われわれは何とか、一年間に約百万〔ポンド〕を海外伝道のために調達します。われわれは今や、戦争に一日に5百万ポンドを支出しています。これらの二つの数字を比べてみましょう。この世において戦争を止めさせることができる唯一のものは、世界中に主の知識を広めることです。また、それゆえに、仮にもしわ

---

26) *Ibid.*, p. 13.

われわれが再び攻撃されて脅威に曝され、その結果われわれの帝国が脅威を受けた時、過去の諸帝国の轍を踏まないとすれば、われわれは神の信頼 trust を損なってはならないことを理解しなくてはなりません。これまでになかったほどの伝道精神が国民全体に行き渡らなくてはなりません。キリスト教以外の諸宗教に対してわれわれがまったく公平に責任を果たすべきことを、われわれは十分に理解しなくてはなりません。インドのイスラム教徒に対して、彼らの信仰への絶対的な敬意を払わなくてはなりません。しかしながら、国民全体に、国民の偉大なる信託の一つをより効果的に果たすような伝道精神が存在しなくてはなりません<sup>27)</sup>

ここにはイギリス帝国の存在がキリスト教の布教という伝道の観点から合理化されている。この意味でウィントン・イングラムの帝国観は19世紀的な枠組みの中にあっただと言えよう。

以上のように、第一次世界大戦直前の3つの悪徳、国民の信仰心の衰退、欲望、飲酒、帝国の伝道活動の放置という5つの罪を指摘している。

### 3 教会の悔い改め

国民はこれらの5つの重大な罪を悔い改めなければならない。国民に悔い改めさせるのが教会の役目である。ところが、「国民は、悔い改めない教会から悔い改めのメッセージを受け取ることはないであろう。『悔い改めよ』と叫ぶ明らかに独りよがりな教会に耳を傾けることはないであろう。国民は自ら悔悛する教会からそのようなメッセージを初めて受け取るであろう。それゆえ、われわれは、国民に悔悛を説教をする前に、われわれ自身の心に注意を向け、自らの家を整え、われわれが教会として悔い改めることを確認する義務がある<sup>28)</sup>」と論ずるのである。

第1に教会は、戦争中に明らかになった一つの失敗を悔い改めなくてはならないと以下のように論じている。すなわち、わが国の戦艦や野営地に集まった

27) *Ibid.*, p. 14.

28) *Ibid.*, p. 15.

国民の成年男子に対して、祈禱書に示された聖餐の宗教を痛感させることに失敗した。巨大戦艦にわずか20人の定期的な陪餐者しかいないのはなぜかという問題に立ち向かわなければならない。あるいはまた、ある野戦基地 a home camp で、兵士の70%が公式に国教会信徒として登録されているにもかかわらず、5,000人の兵士の中で20人しか早禱に参加しないという大変不名誉な事態に直面している。従軍牧師を非難してはならない。兵士たちは事実上すべてわれわれの教区で育った。彼らに何が起こったのか。彼らが、多くの場合、堅信式を進んで受けようとするのはまったく真実である。しかし、なぜそれ以前に堅信式を受けなかったのか。なぜ国民の中の成人男子の大部分が、祈禱書の聖餐宗教に属さないのか。われわれは、その理由を見出さなくてはならない<sup>29)</sup>。このようにウィントン・イングラムは、兵士や水兵の大多数がイングランド教会の提供する信仰を持っていないことを問題視するのである。

教会が直面しなくてはならない第2の問題は、イングランド教会が労働の世界と接触していないという事実である。ウィントン・イングラムは、「大工の教会が今日の大工によってまったく無視されているのはなぜかを真剣に探求する理由がある。それは、われわれの多くは有閑階級出身であるか、われわれは寄付を求めて富者の所に行くということであるのか。それがどうであれ、われわれは教会として、今日労働の世界にまったく影響力を持っていないという事実直視しなくてはならない<sup>30)</sup>」と力説する。この問題は国民伝道の提唱以来、すでに様々な機会に指摘されていることである。

第3の問題は、教会自体が一つの兄弟関係 a brotherhood であるかどうかという問題である。主教職への就任が教会論文や苦しさ、さらに信徒を混乱させるような党派心を引き起こすと述べたあるアフリカの主教の言葉を、ウィントン・イングラムは引き合いに出している。「もしわれわれが兄弟愛の福音を説くのであれば、われわれ自身が兄弟関係にあるのかを問わねばならない。また、われわれが兄弟愛の中で悔い改めて生きるものでなければ、われわれが友愛

29) *Ibid.*, pp. 15-16.

30) *Ibid.*, p. 16.



ないし協調という有効な福音を説くことはありえないであろう<sup>31)</sup>と。

第4に教会の怠惰の罪である。一部の教区で何も行われていないとすれば、主教区全体の恥である。それは、聖職者だけでなく、信徒の責任でもあり、信徒は聖職者にすべての仕事を任せるべきではなく、自ら進んで教区の活動を行わなくてはならないと注意する。さらに、第5に、教会の最も許し難い罪は、鈍感さであると言う。「教会は生ける神の教会であって、何ものにもまして、それは輝かしいものでなくてはならない」とする。彼は、前線の塹壕から帰ったある若者が、自分の所属する教区教会に行ったが、その鈍感さに我慢がならず、YMCAに行ったという事例を紹介し、聖職者に現代の問題に鈍感であってはならないと注意を喚起している<sup>32)</sup>

この後ウィントン・イングラムは「誰が教会の悔悛をはじめなければならないのか」と問うて、それは主教たちであると言い切る。もし平信徒が、悔悛のない聖職者から悔悛のメッセージを受け取ろうとはしないとすれば、聖職者は、悔悛のない主教を手本にすることはないと主張する。そして彼自身が初めて主教になったときに、ある若者が「私の主教には、イエス・キリストから直接に私のところに来てほしい」とウィントン・イングラムに述べた言葉を、主教の使命と感じて来たことを確認している。

そして、具体的には、フラムでの修養会 *Retreat at Fulham* のような機会において、聖職按手式の時に各人が抱いた責任感を思い起こし、その命令のどれだけが実現したかを自問するように聖職者たちに対して要請している。いずれにせよ、夏と秋のフラムの修養会において聖職者は神と二人きりの機会を持つことになろうとしている。

また、ウィントン・イングラムは平信徒についても修養会を開催することを明らかにしている。その際彼は、平信徒も司祭 *priest* であると強調する。教会全体が「キリストの体」であり、司祭長イエス・キリストがいるだけである。その際ウィントン・イングラムは堅信式 *confirmation* を重視する。すなわち

31) *Ibid.*, pp. 16-17.

32) *Ibid.*, p. 17.

「われわれは皆、堅信式の時に司祭に任命され、按手において聖霊を受け入れた。堅信式以降は、あなたがたの平信徒は聖職者を批判したり、教会の仕事に関心を持ったり、教区基金に寄付を与えたりするだけでなく、奉仕し、証することを期待されている<sup>33)</sup>」と。かくして、「私は躊躇なく、もし主教たちが悔悛において先頭に立てば、聖職者はそれに従い、さらに、平信徒もまた、自らの良心に忠実であれば、従うであろう<sup>34)</sup>」と締めくくっている。ウィンントン・イングラムが第一次世界大戦中にフランスの前線や海軍基地を訪れた際に、兵士たちに堅信式を施して按手の行為を盛んに行ったこと<sup>35)</sup>の背景には、このような彼の考え方があったと理解できよう。

#### 4 希望の伝道

そして演説の最後でウィンントン・イングラムは、伝道は悔悛の伝道であるだけでなく、希望の伝道でもあると主張する。「もしわれわれが悔悛を得られさえすれば、われわれは豊かな希望を得ることになる。というのも、神は、慎ましい国民や慎ましい教会、慎ましい魂とともに何かを行うことができるからである。われわれは、人間性において、国民において、教会において希望が増すのを見出し、すばらしい神への奉仕の奔流に希望が現れるであろう。私は、多くの人は神への奉仕を通じて人生の塩を味わったと信じる。そしてそれは時代の最も希望に満ちたしるしの一つである。戦後に彼らが古い自己に戻ることはなく、ますます次のように意識するであろう。彼らはキリスト教徒になるために生まれたのであり、古い個人的な宗教は最も高貴な人格へ導くことはない。人はキリスト教徒になるためだけでなく、教会信徒になるために、教会の中で自らを見失ったり見つけ出したりするために生まれた、と。それゆえ、われわれが今日この偉大な努力に着手したことは、すばらしい希望とともにあ

33) *Ibid.*, p. 18.

34) *Ibid.*, p. 19.

35) *Winnington-Ingram, Fifty Years*, pp. 118-124; *Carpenter, op. cit.*, pp. 279-291. 1915年の春、聖週間にウィンントン・イングラムは、自らがチャプランを務めていたロンドン・ライフル旅団のフランスの前線を訪問している。このときも、精力的に堅信式を挙げている。

る<sup>36)</sup>」と。

以上のように、国民伝道は希望の伝道でもあり、悔悛自体が希望と結びつくことを力説している。

#### Ⅳ おわりに

第一次世界大戦は、イングランド教会に大きな影響を与えた。戦争を「神の裁き」と考えた教会は戦争の中で自らの使命を改めて確認しようとしたのである。それは熱心な平信徒や使命感に燃えた若い聖職者たちに共有されたのである。しかしながらその一方で、使命感を持って従軍牧師として戦場に赴いた若い聖職者たちは兵士たちの不信仰を再確認することとなる。このような状況の中で、「悔悛と希望の国民伝道」が平信徒や若い聖職者によって提唱されたのである。

成立過程の分析において明らかになったように、国民伝道は、第一次世界大戦の中で国民の悔い改めの必要と、それを説く教会自らの悔い改めという二つの課題を担うものであった。しかしながら、その後の活動を見ると、教会自身の悔い改めとして、特に主教を中心とした修養会という形で主教区の聖職者に意識を喚起するという活動が主であったと言えよう。さらに、国民伝道の議長を務めたウィントン・イングラムの演説を見てみると、そこには、大戦直前の国内の政治的・社会的対立、信仰の衰退、飲酒、性欲、帝国への伝道の軽視といったイングランドの犯した5つの罪が列挙されている。そしてこの5つの罪を国民に悔い改めさせなければならないが、その役目を果たすべき教会自身が悔い改めなくてはならない。すなわち、兵士たちにイングランド教会の信仰が届いていないこと、イングランド教会が労働者階級と接触していないこと、教会内の派閥対立の結果イングランド教会自身が兄弟愛で結びついていないこと、さらに教区教会の怠慢と信者に対する感受性の無さが指摘されている。そ

---

36) Bouchier, *op. cit.*, pp. 19-20.

してこのような教会の側の悔い改めのためには主教が中心となって修養会を実施し、また信徒向けの集会などで意識改革を行おうというものであった。そして、悔い改めという行為は決して兵士や教会自らを貶めるためではなく、信仰の問題として同時に「希望」であると力説するのである。

以上のような考え方が、「悔悛と希望の国民伝道」の基本的な考え方であった。国民自身の悔悛であると同時に、教会の自己反省であったと言えよう。国民伝道の起源となった1915年初頭における教区司祭や信徒からの呼びかけもそのような教会自身の自己改革を求めるものであった。しかしながら、このような下からの要求に対して、実際に教会首脳部はどれだけ真剣に対処し得たかは別の問題であった。そもそもカンタベリー大主教デーヴィッドソンは当初必ずしも積極的ではなかったし、さらに国民伝道の議長に就任したウィントン・イングラムは、19世紀のヴィクトリア朝の道徳的な価値観にとらわれていた古いタイプの聖職者であったと言われている<sup>37)</sup>。実際、彼の演説のあちらこちらに禁酒運動や節酒運動の言及が見られるように、道徳主義的な対応が見られる。また帝国に対する彼の認識は、ウィリアム・テンプルが後に抱いたエキュメニカルな方向での帝国に対する理解<sup>38)</sup>とはかなり異なったものであった。さらに、1916年1月からは徴兵制が正式に敷かれ、徴兵への聖職者の適用免除が規定されたことに鑑みると、戦争の中での聖職者の役割を積極的にアピールするという役割を国民伝道が担ったとも考えられよう。ロンドン主教ウィントン・イングラムが若者の兵士への志願や徴兵を大変積極的に進めた聖職者の一人であったことを思い起こすと、本来運動が提唱したはずのイングランド教会の自己改革という問題は必ずしも十分には展開されないまま、国民を戦争に動員していく、あるいは戦争における聖職者の社会的役割のアピール

37) これはウィントン・イングラムに関する様々な記述に共通する点である。最新のオクスフォード版国民伝記辞典でもこの点が強調されている。*Oxford Dictionary of National Biography*, Vol. 29, pp. 280-282.

38) これについては、吉田正広「戦争とイギリス国教会—ウィリアム・テンプルの活動を中心に」松本彰・立石博高『国民国家と帝国—ヨーロッパ諸国民の創造』山川出版社、2005年を参照。

といった側面を考えなくてはならないのではないだろうか。この運動の書記を務め、自らも精力的に全国を演説に廻ったウィリアム・テンブルが、その伝記の中で、国民伝道に対して決して成功したとの認識を示していないことに注意する必要がある<sup>39)</sup> 第二次世界大戦期にカンタベリー大主教に就任することになるウィリアム・テンブルは、やがて、セント・ジェームズ教会の主任司祭の職を辞して、教会の自己改革運動である「ライフ・アンド・リバティ」運動に乗り出し、さらに教会の改革を具体的に進めることになる。

39) 1916年12月7日に国民伝道の正式な「書記報告」が提出され、運動の成果がある程度報告されている。それによると、国民伝道の様々な礼拝活動に参加しているのはすでに教会に愛着を持っている人々であって、それ以外の人々を惹きつけているとは言い難いこと、ただし教会内ではこれまで教区ごと、聖職者ごとに隔てられてきた障害は除かれて新しい教会の交わりが生まれつつあり、教区司祭はこれまでよりも一般の人々と緊密な接触を持っていることが報告されている。さらに、教会改革の緊急性と社会改革の霊的な関連性がかつてないほど強く認識されていると報告されている。この報告書はおそらくテンブルが関わっており、この報告書作成の過程が、さらに今後の教会改革運動へと繋がっていく (Iremonger, *op. cit.*, pp. 214-215.)。なお、この後、「継統委員会」が国民伝道の書記を中心に構成されていくが、この中でテンブルが中心的な役割を演じ、彼は特にイングランド教会内部の諸宗派の協力を力点を置いている。アイアモンガーによると、テンブルは当時教会の中で独自の存在であった高教会派を活動に取り込む努力をしている。この活動は後の「ライフ・アンド・リバティ」運動に直接つながる。(Ibid., pp. 216-219.)